

名古屋外国語大学海外派遣プログラム成果報告書

2024年 5月 30日

学部・学科名 世界教養学部・国際日本学科

担当教員氏名 近藤 行人

1. 区分	中期留学 ・ 語学研修 ・ 海外実習
2. プログラム名称	ハノイ国家大学外国語大学日本語教育実習
3. 渡航先国名	ベトナム
4. 派遣期間	2024年 3月 4日(月) ~ 2024年 3月 15日(金) 12日間
5. 派遣先教育機関名	ハノイ国家大学外国語大学
6. 参加学生数	5名(金) 約2週間
7. 派遣目的	ハノイ国家大学外国語大学(以下、ULIS)学生を対象として、日本語授業の見学、現地での教壇実習を実施し、あわせて、異文化体験やULIS学生との交流の機会をもつ。
8. 派遣内容	<p>① 事前指導 : 教壇実習で担当する予定の教授内容につき、授業計画立案、教案作成等を行い、指導を受ける。</p> <p>② 授業見学 : ULISにおける日本語授業</p> <p>③ 教案指導 : ULIS教員による教案指導を受ける</p> <p>④ 教壇実習実習 : ULIS日本語学科の授業において、各実習生あたり8コマ分の教壇実習を行う。実習に先立ってULIS教員による教案指導を受け、実習後に批評・助言を受ける。</p> <p>④ 異文化体験 : ULIS学生との交流</p> <p>⑤ 技能実習生送り出し機関の見学と交流</p> <p>⑥ 実習報告書の作成</p>

<p>9. 成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習の実施（授業見学、授業の実施、振り返り） 初級クラスの「文法」クラス、中級クラスの技能別クラス（「聴解・会話」「読解・作文」、中級レベルの技能別クラスにて計4コマの実習を行った。実習生は自らの実現したい教育を目指した授業設計を目標に日本語授業を実施した。 ・ベトナム人学生との交流の実施 学内外において ULIS 学生との交流の機会を持った。 ・技能実習生送り出し機関の見学 技能実習生送り出し機関を訪問し、寮生活や送り出しまでの期間の生活の様子を見学した。また、クラスに入り、日本文化に関するプレゼンテーションを実施し、学生と交流した。 ・報告書の完成 実習を通して学んだこと等をまとめ、報告書を作成した。
<p>10. 備考</p>	

以上

教壇実習報告書

実施日・担当項目

- 1 2024年3月6日（水）【聴解】「ゆずります」申し出る・相手の希望をたずねる
- 2 2024年3月8日（金）【作文】順序立てて、レポートを書く①
- 3 2024年3月11日（月）【文法】みんなの日本語 第37課
- 4 2024年3月12日（火）【作文】順序立てて、レポートを書く②

学生：2年次生（3/11のみ1年次生）

今回の実習で私は、聴解・文法をそれぞれ1回ずつ、作文を2回、合計4回の授業を担当した。教案を作成するうえで苦労したことは、すべての言動に目的を持たせることである。学生の発話一つに対しても「なぜそれを発話させる必要があるのか」常に意識することが求められた。また「学生が自分で考える」課題を用意することにも苦労した。

授業中に行う練習を考える際に、文脈を意識しない機械練習が多くなりがちだった。学生が自ら考えて答えを導く、実践的な練習を取り入れることが難しかった。

反省点および改善点としては、学生主体の授業作りができなかったことが挙げられる。教壇実習ということもあり、自分が人前に立って50分間話すことに慣れなければいけないという気持ちが強かった。現地の先生からも「ティーチャートークが多い」「グループ作業を取り入れるとクラスの雰囲気良くなる」といった指摘や助言をいただいた。実習は自分が教師になるための練習をする場であるが、それ以上に、学生にとって学びのある場にする必要があることを実感した。

一方で良かった点は二つ挙げられる。一つ目は授業内容の工夫である。4回の教壇実習の中で最も手応えを感じたのが、3月6日の聴解の授業である。学生たちは、教材付属の音声は聞き慣れているだろうと考え、音声を流すのではなく、教師自ら読むことにした。学生たちは真剣に耳を傾け、1回で聞き取ることができた人もいた。私が2回目のスクリプトを読む前に「先生もう一度言ってください」と言う学生もおり、積極的な授業への参加がみられた。

二つ目は臨機応変な対応である。今回の実習では、前日に担当箇所が変更になったり、当日の授業時間が短くなったりなど予想外なことが多々起こった。また学生が課題に取り組むようすを見て、予定より解答時間を長くすることも、しばしばあった。しかしそのような状況でも授業で達成すべき目標は何か、そのためにどの練習が必要なのか見極め、その場で授業内容を調整できた。

この実習を通して学んだことは、授業は学生と教師が共に作り上げるものだということである。指示が分かりにくかったり、問題の解答時間が短かったり、いろいろな不手際な部分があったと思う。しかし4回の教壇実習のなかで必ず毎回、自分から手を挙げて発言してくれる学生がいた。学生たちの協力があって授業が成立できたことを強く実感している。参加したくなるような授業作りと、学生と教師の信頼関係が重要だと学んだ。

上手いかなかった日もあったが、学生たちが授業後に「楽しかったです」と声をかけてくれたり「良い授業だったと思います」と握手を求めてくれたりして、とても嬉しかった。学生からの温かい言葉に救われる場面が何度もあった。私の授業を評価し、的確なアドバイスをくださった先生方にも感謝を申し上げたい。自覚していたことだけでなく、自分では気付かなかった部分も指摘していただき、参考になった。良

い点は今後も続けていき、良くなかった点は改善策を考え、今後に繋げていきたい。
教壇実習を終えて、教師として日本語教育に携わりたい気持ちが、より一層強くなった。

技能実習生送り出し機関 見学報告

見学日時 2024年3月7日

見学場所 VJEC 国際株式会社

送り出し機関の様子

見学させていただいた技能実習生送り出し機関はベトナムの首都ハノイの郊外に設置されている。機関は主に工場のような実習場所、日本語教育センター、学生寮、食堂という四つのパートに分かれていた。どちらかという中国の田舎にある高校に近いイメージを持った。工場のような実習場所では数名のベトナムの技能実習生が電気溶接や機械修理など日本の工場で求められる技能を一生懸命練習している様子が見られた。

日本語教育センターでは多くのベトナム技能実習生が日本語の授業を受けていた。教室は日本語能力試験のレベルによって分けられており、日本語能力試験 N4 や、N3 相当の日本語能力の学習者が一番多いという。教室では、ベトナム出身の日本語の先生が大きな声で授業をしていた。学生の男女比は 7 : 3 で女性が多く、20 代の若者がほとんどであった。

技能実習生は全員が機関の寮に住んでいた。かなり古い寮だが、きれいに片付けられていた。驚いたことに、一部屋では 10 人の技能実習生が暮らしていた。

ほとんどの技能実習生が送り出し機関の食堂で一日の食事を済ませているという。食事の時間になると食堂が混んでいて少し不便そうであった。

実施事項

①施設見学

技能実習生送り出し機関の責任者とスタッフに案内してもらい、機関の見学をした。

1 授業見学

日本語教育センターで日本語授業を見学した。一クラスには 20 人程度の学生と 1 人の先生がいる。授業ではベトナム人の先生が間接法を用い、ベトナム語で日本語の文法や単語などを教えていた。学生は皆勉強熱心で、日本語に対する情熱が感じられた。

1 日本文化の交流会

機関訪問に参加した名古屋外国語大学の学生 5 人がそれぞれが魅力的であると考えられる日本文化の紹介を行った。5 人は「日本の交通」、「ラーメン文化」、「おひとり様文化」などに関するスライドを作成し、紹介しながら、技能実習生候補者との交流を図った。

④ VJEC 国際株式会社の概要の紹介

最後に技能実習生送り出し機関を運営する会社の日本語教育部門の責任者より、会社の業務紹介、運営方針と技能実習生送り出しの流れについての説明を受けた。

感じたこと

技能実習生送り出し機関の管理方針についていくつか考えたこともあった。機関に

入ってから技能実習生に会う度に実習生からの挨拶がされた。普通の軽い「こんにちは」ではなく、ちゃんとお辞儀をするような挨拶であった。

また、施設内に貼ってある「言葉を知り、世界を知る」ということばがとても印象深かった。本当にその通り、技能実習生の皆さんが日本語を勉強して新しい可能性を広げられればいいなと思う。

交流会(ベトナムと日本の大学生生活)

交流会日時：2024年3月14日(木)

参加者：実習生、22J6クラスの2年生

1. 行事内容

22J6クラスの2年生と全員の実習生で文化交流をした。

実習生からは、日本文化と名古屋外国語大学について紹介した。日本文化として、実習生が訪れたことのある日本の観光名所を紹介し、名古屋外国語大学については、日本の大学の概要と学生の日、留学生の取り組みを紹介した。

ベトナムの学生からは、ニュース形式の紹介と、グループごとのベトナム文化やハノイ国家大学外国語大学についての紹介があった。

ベトナム文化として、ホワンキエム湖の観光スポットや伝説、ベトナムの伝統料理のフォンやブンチャー、バインミー、訪れるべき場所としてハノイ最大の屋内市場であるドンズアン市場が紹介された。ハノイ国家大学外国語大学については学生たちがよく食べる学内のご飯と、1年次の軍事訓練が紹介された。

2. 学生との交流

互いの発表が終わったあとは授業時間が終わるまで実習生を一人入れたグループで交流した。大学で何を学んでいるか、おいしい食べ物は何か、おすすめの観光スポットはどこかなどの質問があった。

3. 交流会の様子・感想

実習生からの発表の間、学生たちは真剣に話を聞いていた。お互いの発表が終わった後の交流ではどのグループの実習生も質問責めにされていたことから、決して興味がないわけではなく、聞くときはおとなしく聞くことがよしとされているように感じた。